動物物語　狼の王ロボ

アーネスト・トムソン・シートン

薄田斬雲訳

青空文庫

これはアメリカのアーネスト・トムソン・シートンという人が書いた物語で、文中『私』とあるのはシートン氏のことです。シートン氏は幼いころから動物が大好きで、動物に関する物語と絵をかくことを一生懸命勉強しました。そしていつも山岳や草原に露営の生活をして、野生動物を深く観察し、りっぱな動物物語をたくさんあらわしました。この『狼の王ロボ』は、その中でも傑作といわれる面白いものです。

おおかみ狩りの勧誘状

「カランポーの谷の王様おおかみロボの首に、一千ドルの懸賞がかけられた。」

このうわさは、土地の新聞から全メキシコへひろまった。カランポーというのは、北部メキシコを流れている川の名だ。その川の流域には、広々とした草原が開け、それが大きな牧場になっていた。ところがこの谷に一群のおおかみがすんでいて、しきりに家畜をあらす。そのおおかみの群れの王と見られるのは、土地の人々からロボと呼ばれる、まことに悪がしこく獰猛なやつであった。

土地の羊飼達はもちろん、よそからもおおかみ狩りを自慢の連中が続々とやってきて、この悪獣を退治しようとしたのであったが、いずれも失敗して引きあげる。そこでこの一千ドルの懸賞広告が新聞にでたのである。

そのときカランポーに住む友人から、私のところへ、このおおかみ狩りをすすめる手紙がきた。その一節に、こんな文句があった。

「このロボというのは、灰色の大きなおおかみで、カランポー狼群の王といわれるだけにとても知恵がはたらき、毒薬にもわなにもかからない。この地方の牧場でその害をこうむらないものはなく、深夜はるかにその長くひいた異様なほえ声を聞くと、たれでもぞっと身ぶるいがするという。ロボの一党は、非常に数が多いようにいわれているが、私の調べたところでは、五、六頭にすぎないようだ。しかし、どれもこれも狂暴なやつばかりである。私には今のところそれを退治るいい工夫が浮かばん。このさいきみの腕にたよるほかない……」

さんざんな失敗

私は以前、おおかみ狩りをしたことがあるが、おおかみを追っかけまわる痛快さといったらない。そのときの味がわすれられないので、友からの手紙を受けとるとろくに準備もしないでカランポーへ乗りこんだ。

友は大喜びで私を迎えてくれた。その晩は何年ぶりかで一緒に酒を酌みかわしながら、私はくわしくようすを聞いた。

友は語る、

「このあいだも、テキサス州から、タンナリーという男が、おおかみ狩りはおれにかぎると大元気で乗り込んできた。相当経験があるらしく、小銃や短銃も高価なものをもち、乗馬と二十頭の猟犬を連れていた。それで『明日にもロボの首を取ってきて床の間の飾り物にする』と大きなことをいっていたものさ。ところが初日でみごと失敗してしまった。というのは、このタンナリーは、テキサス

州の平な草原のおおかみ狩りにはなれてもいたろうが、このカランポーの谷は、高低があって、川の支流が縦横にいりまじっている。猟犬はきたばかりの不案内の土地なので、狼群を追いつつ四方へちっていったのはいいが、勝手を知ったロボの群れにひどい逆襲をくらって、夕方帰ってきたのは、たった六頭。その中二頭はあばらをかみさかれているというみじめさだ。タンナリーはその後も二回でかけたが、一層の不成功で、最後の日には、その乗馬が断崖からころがり落ちて死んだ。彼が、すっかり力をおとして、テキサス州へ帰ったのは一昨日のことさ。」

毒殺の計

翌日から私は地形を見にまわった。なるほどカランポーの谷は、土地の高低があって、川の流れも多く、とても馬や猟犬でおおかみを追いまわせそうもないところだ。

「毒か、わなを用いるほかない。」と、私は友に語ったのだが、大きいわなは持ってゆかなかったので、まず一服毒を盛ることにした。

私は、わかい牝牛の腎臓脂肪へチーズを交ぜ、それを陶器皿に入れてとろ火で煮た。金物の臭いを避けるために、中の骨を小刀がわりに使った。この煮物をさましていくつもの塊に切り、その切り口へあなをあけて、毒薬を詰め、その上へチーズを厚くぬってふたをした。このご馳走をつくるあいだ、私は人間の臭いがつかないように注意して、牛のほふったばかりの温かい血へ浸した手袋をはめ、また私の息がこの餌の肉へふきかからないように、マスクをかけた。こうして丹念につくったご馳走を、同じ血へ浸したわらづとの中に入れた。それを持ってカランポーの谷を一巡し、一粁おきぐらいに一つとずつを草のあいだへおいてきた。狼群は鉄砲をおそれて日中はあまりでないし、また人間の姿が見えると、さっさと逃げてしまうので、この日は別段危険もなかった。

その夜、たしかにロボのほえる声が聞こえたというので、私は大喜びで翌朝早く結果を見にでかけた。

はたしておおかみの足跡はたくさんある。ロボの足跡は、普通のおおかみよりは大きいのですぐわかった。その足跡から推すと、背の高さ一メートルにちかく、体重も六、七十キロくらいはたしかにある。おそろしくたくましいやつらしい。

やがて最初の餌の肉のところへくると、大きな足跡が、そこへ立ちどまった形に残っていて、肉塊はなくなっている。

「しめた！」

私は胸をおどらして、ついてきた者達にほこった。

「やっこさん、一、二粁も先にきっとかたくなっているぞ。」

私どもは馬に一むちくれて、威勢よくつぎの餌肉のところへいった。はたしてそこにもない。私は狂喜して、

「ロボばかりでなく、あの畜生ども、枕を並べて往生しているにちがいない。」と叫んだ。

その付近を見まわったが、しかしおおかみの死体はなかった。足跡ばかりたくさんに残っている。第三番目の餌肉へきてみたが、ここにも肉塊はなくて、足跡はさらに第四番目へつづいている。

私は「はてな。」と思った。と同時に疑いと喜びとがごっちゃになってきだした。

私たちはだんだん心配になって、第四番目の餌肉のところへきて

みると、おどろいたことには、肉に手をつけてないばかりでなく、そこへ、前の三か所の餌肉も一緒に並べてあるではないか。しかもごていねいにも第五番目の餌肉までが、ちゃんと持ってきて積みあげてあるではないか。

「へー！」と、私は全身の血をぬき取られたような気持ちになった。りこうぶった私の計略は、狼王ロボのためにすっかり裏をかかれてしまったのである。

「とてもこれは毒で退治られる代物ではない。」

と私はさじを投げ、大型のわなを郷里へ注文してその到着を待った。

ぜいたくな食べ物

そのあいだの一夜、おおかみの群れがすごいいたずらを演じて、カランポーの谷にすむ人たちを興奮させた。一人のわかい羊飼いがその模様を私に物語った。

「旦那、おおかみというやつは、羊を食うのでなく、ただおどかしてかみ殺しては喜ぶのです。一体、羊は、千頭から三千頭までを一群にして一人二人の番人をつけておくのです。夜はかこいの中へ入れて、両端の小屋へ番人が一人ずつ寝ています。羊はちょっとしたことにもおどろく臆病な動物ですが、中へ五、六頭の山羊を入れておくと、羊はこの山羊をたよりに思って、夜などもなにかさわぎがおこると、みな山羊のそばへより集まるのです。ところがあのロボの悪党め、そこのことまでよく知っていて、昨夜は先に山羊をかみ殺してしまったのです。羊どもはたよるものがなくて、八方へちりぢりになったものだから、とうとうかみ放題に二百五十頭も殺されたのです。」

「まるで子供が、玩具のサーベルでトマトをやっつけるようなものだね。」と私はあきれていった。

「まったくです。」と、若者は話に油が乗って、

「あのロボのやつには、これまでにもう羊や牝牛合わせて二千頭あまりやられています。一体おおかみは意地きたないやつで、なんでも腹一杯食いさえすれアいい。食べ物のよしあしなんてかまわないのが普通ですが、あのロボの仲間にかぎっては、口がなかなかおごっていて、死んだ肉は食わない。人間がほふった家畜は食わない。なんでも自分の歯でかみ殺した上等なのだけ食うのです。一番好きなのは当歳仔のやわらかな牝牛で、年とった牛や馬は好かない。人間よりもよほどぜいたくです。また羊の肉もあまり好かない。ただ、かわいそうに逃げまどうやつを片端からやっつけてしまうのです。本当ににくいたらありゃしません。」

狼群と牛の格闘

羊よりは、わかい牝牛を好むというのは初耳で、私は話をそこへ向けると、若者は、先年、ロボが牝牛をとり殺したという実見談をはじめた。

「私はそのときはなれたところから見ていたのです。最初牛の群れとおおかみの群れとが原中でばったり出くわしたと思ってください。いばったやつで、ロボめ、自分は手出しもせずに、仲間の奴等に仕事をまかせているのです。ロボのつぎの位にいるブランカという白

おおかみが大将になって、五、六匹のおおかみが牛の群れへおそいかかってきました。牛の中には一頭牝牛の当歳仔がまじって、これは後列へかくれていました。牛の群れは一列に戦線を張って角をふりたてたので、白おおかみ等もちょっと手がでません。すると、さっきからそれを見ていたロボのやつ、一声ほえると、横合いからだしぬけに牛の群れへおどりかかった。牛どもはたちまち列をみだして逃げる。ロボはめざす牝牛へせまる。牝牛はやっと七、八十メートルも逃げたが、たちまち追いつかれてしまった。ロボはその喉に食いついたなり、身を沈め、うんとふんばると、牝牛は、角を地についてまっさかさまに大きくとんぼ返りに倒れる。はずみをくってロボもはね飛ばされそうになったが、腰の強いやつで、からだをぴたりと地につけてぐっとふみこたえます。そこへ白おおかみブランカはじめ仲間が競いかかって、見る見る牝牛の息の根をとめてしまいましたよ。ロボのやつ、獲物は仲間にまかせてけろりとしているのです。私は大声に叫んで、馬に乗って追っかけると、おおかみどもは鉄砲がこわいものだから、さっさと逃げていく。私はいい機会だと思って、持っていた毒薬を手早く、たおれた牝牛の体へ二個所に注ぎこんで、そのまま家へ帰りました。おおかみどもは自分の歯でかみ殺した動物は安心して食う習慣ですから、あとでもどってきて、その肉を食うにちがいないとにらんだのです。翌朝私は、「あのロボのやつ、いまごろはかたくなってくたばっていることだろう。」と勇んで、昨日のところへ行ってみると、小面にくいたらありゃしません。毒を注したところだけ、きれいにさき捨てて、毒のない部分をさんざん食いあらしていたのです。一服盛ろうたってあいつにゃ駄目です。」

わなにかかった白おおかみブランカ

そのうち、注文したわながたくさん到着した。私は大急ぎでそれを組み合わせ、夜になってから原の方々へ埋めておいた。翌日見まわると、ロボの足跡はわなからわなへと続いていたが、わなはみなほじり出されて、鉄鎖も丸太もむきだしになっている。足跡から判ずると、ロボは狼群の先に立ってわなへ近よると、仲間を止めて、自分ひとりでうまい工合にかきだしてしまうらしい。私はいろいろ工夫をこらし、方法をかえていくたびもわなをかけてみたが、ロボはなかなかたくみにわなをかきだしてさらしものにするのである。

だが、このカランポーの狼群の行動には、私にとけないことが一つあった。それは私のこれまでの経験によると、おおかみの群れというものは、一匹の指導おおかみにしたがうのがならわしであるのに、ここのはおりおりロボの大きい足跡の前にやや小さい足跡がついているのである。

ところが、ある日、牛飼いがやってきての話に、

「私は今日例のおおかみどもがずっと向こうの方を歩いているのを見ましたが、白のブランカのやつが、ときどきロボの先になってゆくのですよ。」と。

私ははたと手をうった。

「それでわかった。そのブランカはめすなのだ。もしおすおおかみがそんなですぎたことをしたなら、ロボがすぐかみ殺すはずだ。小さい足跡が先に立っていたのもそれでわかった。」

そこで新工夫が浮かんだ。私はわかい牝牛をほふってその死体の

まわりに、わざと地上にむきだしにしたわなを二つおいた。それからその死体から首をきり取って少しはなれたところへおき、その周囲へ二つの鋼鉄製のわなをうめた。この仕事をするあいだ、私は私の手足や道具などをその牝牛の血に浸し、地面へも同じ血を一杯にまいた。このしかけがすむと、今度はおおかみの足でわなの周囲にたくさんの足跡をつけた。この首と胴体とのあいだはせまい通路になっているので、その通路へ一番精巧な二つのわなをうめ、そのわなの端を牝牛の首に結びつけた。

私が知っていることでは、おおかみというやつは、動物の死体を見つけると、それを食おうという気がなくても、きっと近よって、それをかいではいろいろとためしてみるものである。で、私はこのカランポーのおおかみどもも同じ習慣をもっているとにらんだのである。ロボはまたも私の計略を見やぶるかもしれない。けれど、私の心の中にはべつな考えがあったのである。

翌朝、私たちは馬へ乗って昨日のわなの辺を見まわりにいった。おおかみの足跡はたくさんにある。私は胸をおどらした。急いでその跡をたどってみると、牝牛の首もわなもない。私はいよいよ胸の鼓動をたかめて、その辺の足跡をこまかにしらべた。すると、ロボが他の仲間を牛の死体に近づけないよう注意しているあいだに、やや小さい一匹のおおかみが、少しはなれている例の首の方へ歩みよって、そこのわなにひっかかったらしい跡がある。

私は、しめたと思った。

そこでその足跡をつけてゆくと、二キロ足らずのところで、はたせるかな、白のめすおおかみブランカが、わなにかかった足をひきずりながら、牝牛の首をくわえてかけてゆくのに追いついた。牛の首は六、七キロもあろうというのに、ブランカのかける早さは人間の足では追っつけないくらいだった。しかしゆく先には岩石がたくさんあったので、とうとう牛の角が岩へひっかかり、ブランカは動けなくなってしまった。

私たちが近寄ると、ブランカはきっと立ちあがってものすごい長ぼえをした。すると、はるかに木蔭から、同じ調子の一層高いほえ声がひびいてきた。それはロボの声にちがいない。私たちはすぐ得物をふりあげて近寄りざま、ブランカをなぐりつけた。ブランカは力がつきて最後の悲鳴をあげてぐたりと横に倒れた。私は輪縄をその頸に投げかけて、その端を馬につなぎ、一むちあてると、馬は家の方へ駈け出した。

そのあいだ、ロボは遠くでしきりにほえていたが、鉄砲がこわいと見えて私たちのそばへよりつかなかった。

この日、夕方までロボの遠ぼえがきこえていたが、日が暮れると、その声はだんだんに近づき次第にかなしい調子を帯びてきかれた。あらあらしい声でなく、長く引いた苦しげなうめきのようにきこえた。

「ブランカ、ブランカ！」と呼んでいるかのようだ。

夜がふけると、その声は一層近くなって、私たちが昼間ブランカを殺した辺にきた。そこにはブランカの血がたくさんにたれていたので、かれはそこでおこったできごとをさとったことであろう。

羊飼いどもも、「これまで、こんなにおおかみの悲しげな声を聞いたことはありません。」といった。

百三十個のわな

この夜、ロボがただ一匹で来たことは、その足跡で知った。そしていつもとちがって、とても不注意にかけまわったようすである。かれは妻のブランカを殺されたために心がみだれていることがこれでわかる。かれはブランカの死体をさがしにきたが、それを得られなかったうらみに、戸外五十メートルのところで、番犬をさき殺して去った。私は、ロボが狂乱しているのを知ったから、いよいよわなを要所要所にかけておいた。一度はたしかにその一つにひっかかったが、ロボはそれをねじ切って逃げた。その力の強さにはいまさらながらおどろかされた。ロボはブランカの死体を見つけるまでは、その辺を去らない気持ちらしい。私はこの機会にかれを退治してやろうと心をくだいた。

「おしいことだった。ブランカを殺さずに、いけどっておいておとりにしたら、翌日の晩には、きっとロボをつかまえることができたであろう。」とくやしかった。

私は、ありたけのわなを百三十個集め、それを残らずしかけて土にうめた。そのときは毛布を地べたにひろげた上に坐って仕事をし、人間の臭いが残らないようにした。そして、あたり一帯にブランカの死体をひきずりまわして、土にその臭いをうつした。それからブランカの足でもってわなのあいだへ足跡をつけた。こうしてできるだけ用心をして作戦計画を立て、さてその結果はどうかと待った。

その夜中、一度私はロボのほえ声を聞いたように思った。が、しかとしなかった。翌日私は早く見廻りに出かけた。しかし百三十個も飛び飛びにわなを見まわるので、北の谷間を残して日が暮れた。なんの得るところもなく、私たちは家に引きあげた。すると夕飯の席で一人の羊飼いが語った。

「今朝、北の谷で牛の群れがなんだかさわいでいたようです。なにかあったのではないでしょうか。」と。

青く燃えた目

私は翌朝早く胸をおどらして北の谷へとでかけた。わなをしかけておいた場所へくると、突然大きな灰色の姿が、むくりと立って逃げ出そうともがいた。私はおどろきとおそれと喜びに瞬間棒立ちになった。

私はこのとき、はじめてカランポーの谷のおおかみの王ロボの姿をはっきりと見たのである。かれは二昼夜のあいだ、わなを抜けようと苦しんだので、いまはつかれはてている。それでも私が近よると、頸毛をさかだててものすごくうなり声を出し、たちまち深い低いほえ声をしてカランポーの谷をふるわせた。その叫び声の中には、仲間の救いを求める合い図が含まれたことであろう。しかし他のおおかみはついに姿を見せない。ロボは必死に身をもだえ、私へ跳びかかろうとするが、わなが四つ連結しているので、重さも百二十キロからある。いくらもがいても丸太と鉄鎖が一層もつれるばかりで、さすがのロボもいまはどうしようもないのである。それでもその雪のように白い大きいきばをむき出して、鉄鎖をかみ切ろうとする。そのすごさは身の毛がよだつほどである。私が銃床をその鼻先へさしだすと、はげしくかみついてみごとな歯なみのあとを深くきざ



みつけた。（私はいまもその銃を記念として大事にしている）両眼は憎しみといかりに青く燃え、私をにらんで底うなりを発したとき、私の乗馬は震えてあとずさりした。しかしもうロボもうえと苦闘につかれはてているので、やがてぐたりと地べたに横になってしまった。

私は輪縄を手にしたが、ふとかわいそうだという気持ちがして、「こら悪魔、悪業の数々は今報われるときがきたぞ、さ、観念せ。」私はそういいながら、ぱッと縄をその頸へ投げかけた。ところがさすがは狼王、ふっと身をかわして縄をくわえとり、その結び目をかみきってずたずたにした。

どうせ、いざとなれば、銃丸一発でしとめられるのだが、私はそのりっぱな皮を傷つけたくなかったので、他の縄を取って、まず木の枝をロボへ投げると、かれはそれを歯で受けとめた。そこで、私はさっと輪をなげてかれの頸にかけて締めてしまった。そのままぐっとひきしめて息の根を絶とうとする仲間を、私は、

「待った、殺さずに生かして持ち帰ろう。」とおしとめずにはいられなかった。

ロボはもう向かってくる勢いもないから、私達はその口へ棒をかませ、太綱であごをしばった。いまはかれは、まったく観念したような目で私たちを見ている。

「年貢のおさめどきがきた。どうでも勝手にしてくれ。」

そういったようすである。やがて私たちへ見向きさえしなくなった。

そこでみなでロボの足をしばって馬へ結えつけた。ロボはうなりも叫びもせず、だまってなすがままに身をまかせた。その目は光っているが、私たちには向けられていない。遠くの草原をじっと見ている。そこには永い年月かれが君臨した広々とした領地がある。かれの部下は王を失って、いまはその谷間の奥深く逃げていったことであろう。

私たちは家に帰ってから、ロボに頸輪をかけ、じょうぶな鉄鎖でつなぎ、手足を自由にし、輪縄を外して家の前のくいへ結びつけた。そこで始めて安心して私はロボのからだを細かにしらべた。世間の噂では、「ロボの頸に金環がついている。」とか、また、「かれの肩には悪魔の仲間である印として逆十字の斑点がある。」とか伝えられていたが、それはみなうそであった。ただその腰に大きい傷痕が見られたのは、前日タンナリーがロボがりにきたとき、その猟犬がかみついたあとと知られた。

私はロボの前へ肉と水をおいたが、かれは見向きもせず、しずかに腹ばいになってはるかの草原を見つめている。私がステッキで触れても身動きもしない。日が暮れてもかれは一心にかなたを眺めていた。

「今夜、仲間のおおかみどもがくるかも知れない。」

私はみなへ注意しておいたが、ロボは一度仲間を呼ぶようなほえ声を出したきりで、なにごともなかった。

力尽きたしし、翼の自由を失ったわし、またはめすを失ったはとのように、ロボも妻のブランカにさきだたれて力をおとし、この世に望みを絶ったのであろう。翌朝起きてみると、かれはしずかに眠るが如く横たわって冷たくなっていた。

私はその頸から鉄鎖を取り、羊飼いに手伝わせて、ロボをブランカの死体をおいた小舎へ運び入れて、そのかたわらに並べてやった。

そのとき羊飼いはいった。

「ロボはやっぱり王様だったな。その死に方まで……」

私は、この羊飼いが、私の心持ちをそのままいってくれたような気がして、だまってなんどもうなずいたのだった。

（昭和一三年五月号）

青空文庫情報

底本：「少年倶楽部名作選　3　少年詩・童謡ほか」講談社
　1966（昭和41）年12月17日
底本の親本：「少年倶楽部」講談社
　1938（昭和13）年5月号
初出：「少年倶楽部」講談社
　1938（昭和13）年5月号
※表題は底本では、「動物物語（改行）狼《おおかみ》の王ロボ」となっています。
入力：sogo
校正：noriko saito
2017年6月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

動物物語　狼の王ロボ

アーネスト・トムソン・シートン

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　薄田斬雲訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/